

氏名	李 準美 (リジュミ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第20号		
学位授与日	平成21年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	創造の軸 一線遠近法における空間構造の転換一		
審査委員	主査 教授	諸	川 春 樹
	副査 教授	本	江 邦 夫
	副査 教授	中	野 嘉 之
	副査 練馬区立美術館 学芸員	野	地 耕一郎

内 容 の 要 旨

目の前のものが私を通過することで変わってしまう。それが表現の場合は形態の歪みになる。その歪みは人それぞれに個性として表れる。その個性のあるイメージを構成する空間が画面である。その画面の制作に関わるうちに、何より画面の構造を研究することが注目すべき重要な手段として浮かんできた。

美術の歴史を遡ると、長い期間を経て平面絵画は何度も変化してきている。ことに現在では、全体的な構造が視知覚よりも心理的な空間表現に重点が置かれるようになったことが見えてくる。その心理的な空間表現とは実際に、ある対象(物体や空間)から得た情報が個人個人において歪みの像(個性)として表れることであり、その画面形態は本来の対象の形から離れるように変形され、さらにその意味も抽象化されて、まったく新しい空間の様相を見せる。

一度私に表れた歪みの像は、その源泉となった対象と深く関わりながら、私自身の認知や思想、そして視知覚などを超えて変わっていく。それを表現することにおいて、何よりも画面の構造をみることが重要だと考える理由は、構造が単に目に見えるものだけではなく、複雑で多重な意味を内包していると思うからである。おそらく絵画では構造が、文学の伏線に当たっているのである。

作品の中の形態が現実に見たものの形態から離れていく。その実像と表された像との間に生じる距離をどのように評価するかに関してはさまざまな問題があつて、作品の構造に隠れている何かがあるならば、この研究を通じてそれを浮き彫りにし、その問題を解きたいと思った。今まで変化してきている絵画の空間を表す方法の一つである遠近法からその手係りを探る方法を取った。

研究の方法については、遠近法の展開を歴史的にたどり、ことに視点を固定した線遠近法や、開かれた窓の形など、ルネサンス期の空間表現をまず問題にし、さらに絵画が現実世界をそのままに表現することから内面へと向かう19世紀の絵画空間を、ゴッホの作品を分析することで考察した。論述に際しては適宜、自分の作品や自分の内部をみつめる記述を挿入することで、私にとっての空間構造論という性格ももたせようとしている。

本研究の第1章では視知覚の仕組みを始め、線遠近法の完成に至るまでの過程と作品の空間構造を分析し、絵画が線遠近法の形式から逸脱し、しだいに拡張してゆく空間構図を持つようになっていく過程を考察した。その考察によると、実像に近い空間を表現する形式としての線遠近法にたどりつくルネサンス期までの過程と、ルネサンス期以後線遠近法の位相が退色し、画面の奥行きは画面上の深さだけではなくることが見えてくる。画家は画面を借りて認識や思想、そして個人の内面を表現する方向に向かったのである。

そのような時代を生きた画家として私はゴッホを取り上げ、彼の作品の画面を三つの形式に分けつつ、画家の内面あったさまざまな感情が、作品にどのような空間構造として形成されたのかを分析した。それによって絵画に主として支えた視覚的構造から、制作者個人の心理的構造への転換を明らかにすることができたことと思っている。

幾何学を背景にして現実世界を合理的に表現することのできる遠近法は、ルネサンス以降きわめて重要な技法として芸術家の世界に定着していったのであるが、しかし近代に入るとむしろ遠近法から離れてゆく動きが開始された。自身の心の中は合理的に説明できないわけだから、絵画表現においても従来の遠近法の適用は束縛になったのであろう。ゴッホの空間構造の分析からは、そうしたことも理解できた。しかし、いままで蓄積されてきた情報は形を変えて私の中に住み着いているし、空間の認知や遠近法の奥行き構造は否定しがたい現実として私の目の前で毎日進化を成している。だとすれば、私は何を持って過去の人と、また他人と区別されるのだろうか。そして私は何を画面に込めようとしているだろう。

自分の作品をもう一度見つめ直す必要性から、私は次の第2章を通じて制作への思いや過程を見つめたいと考えている。第一章が歴史的過程を辿ったとすれば第2章ではその第一章の延長線の先に立っている自分を意識する章にして、私が受けついでいると思う蓄積された情報がどのように作品にいかされているのかを探ってみた。その第2章では自分の作品と制作に込めている自分の考えを述べている。現在、事実上芸術作品には自己同一性を表す身体性が希薄になり、線遠近法を中心とする画面構造の研究はあてはまらない作品が増えている。第1章で展開したゴッホの画面分析を含めて、そのように見えることには制作する側の主観が強く作用しているのである。そういうわけで論文の後半部ではこの研究の結論として絵画制作の全過程を通じて、空間構造が持っている重要度を再確認すると同時に、新たな表現への志向とそれを支える新しい空間表現の必要

性を主張した。

人間の心に生じた歪みが、作品の中でどのようなプロセスを経て造形表現として出力されるのか、ということに興味を持って開始した研究ではあったが、最終的には今の自分を変えるきっかけをつかむことにたどりついたのは、皮肉なことであるかもしれない。しかし研究の過程で得られた知識、また考察することで気づかされた自身の内面の姿など実になるものも多かった。これからは表現の中に、その時その時の自分なりの秩序を構成することを試み、それを自身の内部と対話させながら新たな表現方法を追求していると考えている。